

論文審査結果の要旨

氏名 田中 章浩

本論文は、音声言語と楽音に含まれるピッチ（音の高さ）を短期的に保持するメカニズムについて、心理学的実験手法を用いて研究したものであり、全5章から構成されている。

第1章では、音声言語と楽音の保持に関する先行研究を概観し、ピッチの保持が、音声言語と楽音の処理において、ともに重要な役割を果たすことを指摘した。そして、音声言語と楽音のピッチ保持について実験をおこない、音声言語と楽音で得られた結果を共通の枠組みで説明することを本論文の目的として設定した。

第2章では、楽音である歌唱音声を保持する実験をおこなった。実験には二重課題法と呼ばれる手法を用い、歌唱音声の保持を単独でおこなう条件と、保持と同時に他の認知課題を遂行する条件の成績を比較した。条件間の成績に差があるかどうかという観点から、ピッチリハーサルの独立性と詳細な性質について考察した。その結果、1) ピッチのリハーサル（能動的な保持）が分節音（子音・母音）や視空間情報のリハーサルと独立していること、2) ピッチリハーサルは運動的表象を利用して系列的に実行されるという性質をもつことを明らかにした。

第3章では、音声言語のうち、日本語話者にとっては外国語に相当する中国語音声の保持について、二重課題法を用いた実験をおこなった。その結果、1) 音声言語のピッチも、分節音とは独立して、能動的にリハーサルされること、2) 音声言語と楽音のピッチリハーサルは共通していること、3) 音声全体をリハーサルする場合、分節音リハーサルとピッチリハーサルは協調的に実行されている可能性があることを示した。

第4章では、日本語話者にとっての母語である、日本語音声のピッチアクセントの保持について、二重課題法を用いた実験をおこなった。その結果、1) 母語音声のピッチアクセントは、単語の識別に関与する特別の表象として、それ以外のピッチ情報とは独立に保持されること、2) 方言の違いによってピッチアクセントの保持が異なることを明らかにした。

第5章では、第2章から第4章で得られた実験結果を踏まえて、音声言語と楽音のピッチ保持を統一的に説明できるモデルを提案し、本論文および関連する先行研究の結果を整合的に説明できることを示した。

本論文で報告された実験はいずれも緻密に立案されており、ピッチリハーサルに関していくつもの新しい知見を世界で初めて報告したと共に、音声言語と楽音のピッチ保持の共通性に関して、興味深い仮説を提案している。この仮説の証明は今後の多角的な検討を待たねばならないが、この分野の研究における作業仮説として重要な視点を与えるものである。以上の点から、本審査委員会は、本論文が博士（心理学）の学位に値するとの結論に達した。